

岩波講座日本考古学 第5巻 『文化と地域性』

10

北海道における地域性

吉崎昌一

一 北海道の地理的環境と文化の特色

北海道は広大である。東北の六県をすべて合せても、広さの点では、北海道にはおよばない。しかも各所に半島が突出し、地域によって気候や植生のちがいが大きい。たとえば、南西部ではブナなどの分布する冷温帯段階の植生であるが、東部や北部では亜寒帯段階の植生要素が漸増、常緑針葉樹林が卓越する地域がみられるようになる。こうした北海道の森林生態系を水平分布からみれば、石狩低地帯あるいは留萌―深川―札幌―苫小牧を結ぶ線で二分できる⁽¹⁾という。

また、北海道東岸では、一月から三月にかけて流氷が接岸し、海上航行や漁はまったく不能になってしまう。だが、流氷はプランクトンの発生を助け、オホーツク海沿岸地域に豊かな水産資源を約束すると同時に、海獣を運んでくるという側面もある。

北海道の西と東、あるいは本州との間にみられるこうした自然環境のちがいは、当然そこに住むヒトの間に異なった生活文化を育んだにちがいない。現在でも両地域のヒトの生活スタイルにはかなりの相違があるが、自然に強く依存していた先史時代においては、その違いは、いまよりはるかに大きかったと推定される。

1 北限の縄文文化

縄文時代を例にとろう。北海道南西部で発見される縄文時代の遺跡や遺物は、おおまかにいえば、本州の東北地方の縄文文化の延長としておさえられるものである。この地域から発掘された遺物の様式を比較してみると、両者が津

軽海峡を境界として分断される、という傾向が認められない。つまり、津軽海峡は、通常いわれているような文化交流のうへのネックとして機能していない。ところが、北海道中央部をとりこめて、亜寒帯的景観をみせはじめる東部地区にいたると、かなり遺物の様相がかわってくる。土器や石器のなかには、かならずしも東北地方で認められる型式と関連しないものがでてくる。石刃を伴出する甕式土器や、石刃鏃文化などがその代表例であるが、これらは、時間的には縄文時代早期に位置づけられながらも、「縄文文化としての性格」がきわめて稀薄な遺物群として注目されているのである。北海道東部には、こうした所屬・系統の明確でない土器群や石器群がいくつかに継起する。土器型式の変化が東北地方のものに完全に連動し、類似性の認められる土器群も、器形や装飾は東北地方や北海道南西部のものと異なっており、簡略化・単純化されたものとしてあらわれる。つまり、用語としての正確さを欠くが、考古学者や美術史家のよく使う「くずれたスタイル」という表現のあてはまるものが圧倒的に多くなる。一般に説明されているように「縄文文化は、本来的には常緑広葉樹林帯から落葉広葉樹林帯にかけての地域にはぐくまれたものである」とするならば、縄文時代にみられる北海道東部特有ともいえるこれらの現象は、生態的背景のちがいに由来する可能性が高い。つまり北海道の東部においては、その生活圏の環境ゆえに、他地域とは若干異なった生活が営まれていた。さきほど述べたが、この地域にしばしば出現する「在来縄文文化」として異質な土器群や石器群の存在は、まさにこうした地域の性格を反映しているのであろう。また、この違いは、北海道の東部が、縄文文化圏の北限の地域としての性格を備えていることを示唆している。

では、北海道に隣接する北の諸地域はどうだろうか。すくなくとも、現状では、ソ連の沿海州アムール流域やサハリン北部あるいはカムチャツカ半島などには、縄文文化はおよんでいないとみた方がよい。例外的に、ごくわずかの縄文文化的要素――たとえば、原体を回転押捺することによって得られる縄文をもつ土器片など――が検出されることはあっても、確実に縄文文化の範疇に所屬させてよい遺跡は発見されていない。南サハリンにおいても、縄文時代

後期と目される少数の遺跡以外には、縄文文化が主体となるような遺跡は発見されていない。⁽²⁾

2 独自の文化の展開

縄文時代の北海道東部にみられたこれらの特殊性は、奈良・平安時代になると、さらに明確な形で認められる。西暦六世紀頃にサハリンより南下し、オホーツク海ぞいにひろがったオホーツク文化がそれである。この場合には、物質文化の相違もさることながら、多数の人骨も検出されており、北海道に居住していた在来の人間集団とは全く異なった形質をもつこと(つまり侵入者である)がつきとめられている。⁽³⁾これらの資料は、完新世のほとんどの時代をつうじて、北海道のなかに当時の日本文化の北端を示す境界が存在していた、という見解を支持するものである。

北海道のもつ地域的特殊性は、これだけではない。もうひとつ、日本文化成立のもっとも重要なステップである弥生文化が、北海道までひろがっていなかったことにも注目しておかねばなるまい。弥生土器そのものの断片的な出土は、北海道中央部にまで確実に追跡されている。⁽⁴⁾だが、それはあくまでも北海道在来の文化に、伴出するという形でしかない。明確な弥生文化の遺跡、つまり稲を栽培した痕跡は依然として認められないのである。当時の稲作技術が北海道に定着することは、気候条件からいっても、不可能であったからであろう。ちなみに、稲作が北海道の地に明確に定着しはじめたのは、ずっと新しく、江戸時代末期になってからだといわれる。したがって北海道には、本州に弥生文化が栄えていた時代から西暦八世紀はじめまで、縄文時代の伝統を強くのこした文化が存在していた。この段階が一般に「縄文時代(文化)」とよばれるものである。

稲作農耕が定着できなかったことで、北海道が弥生文化の圏外におかれたことは、その後の北海道の歴史の流れを大幅にかえることになる。本州を席捲した古墳文化とそれに引き続く律令政府の権力のなかには最後まで組み込まれず、独自の歴史をたどることになった。中世になり、大挙して和人がこの地に移住してきた時に、彼らが出会ったの

は、後世になってアイヌ民族とよばれた人々であった。

こうしてみると、北海道の考古学を論じる場合には、おおまかにいって三つの視点が必要である。第一には、更新世最後の氷期のピークから完新世のはじまりまで。この時代は宗谷海峡が陸橋化していて北海道は完全に大陸の一部としてとらえられる時期である。先土器(旧石器)時代の文化がこの段階の指標となる。文化は、きわめて大陸的な様相をみせる時代である。第二には日本列島の古代文化の北辺地域として、あるいは北から流入する文化との接点としての地域性、第三には、稲作農耕文化の到達できなかった地域としての特殊性である。このアプローチにたつて、これらの問題が端的にあらわれるいくつかの時期について概観してみよう。

二 先土器(旧石器)時代の北海道

1 ナイフ形石器の文化

北海道における先土器(旧石器)時代の遺跡は、きわめて断片的な資料を除き、二万年前ころからのものが多い。それらのうち初期のもので性格がある程度判明しているのは、石刃技法をもたないナイフ形石器を特徴とする石器文化である。石狩管内千歳市三角山遺跡⁽⁵⁾はその一例である。ここからは、¹⁴C年代で21450±750 B.P. (Gak-4346)、FT年代で21700 B.P.という値をもつ、小型のナイフ形石器が出土している。石器素材の黒曜石は、北東方向に直線距離で一七〇キロメートルはなれた北見管内白滝産⁽⁶⁾のものと、北西方向に八〇キロメートルはなれた後志管内赤井川産⁽⁶⁾のものが利用されていた。

だが、こうした複数の遠隔地からの素材が利用されている背景が、交易によるものなのか、あるいは、特定グルー

プの季節移動の証拠として理解すべきなのか、まだはっきりしない。

石刃技法をもたないナイフ形石器を出土する遺跡は、十勝管内更別村勢雄、同帯広市帯広空港南Aなどからも知られている。この種小型ナイフ形石器の一群は、その製作手法や形態からみて、本州、とくに裏日本で発見される初期のナイフ形石器と共通する性格をもち、巨視的にみれば、その文化圏内に含まれるものとしてよい。

2 前期白滝文化

ナイフ形石器を特徴とする石器文化の次には、美麗な大型石刃の文化があらわれる。本州のように、石刃で作られた変異に富んだナイフが継起する段階は、いまのところ認められない。北海道北見管内白滝第一三地点出土の遺物——石刃・彫刻刀・舟底形石器、厚手のスクレイパーなどを主体とし、両面加工の石槍類(ポイント)がないか、あるいはほとんど伴わないことを特徴とする石器文化がこれである。この文化は本格的な細石刃文化に先行するもので、前期白滝文化とよばれている。同種の石器群は、北見管内中本遺跡ほか若干が知られているのみで、あまり例は多くない。

前期白滝文化と同一の文化は、本州からは発見されていない。この時期の本州には各種のナイフ形石器の文化が継起しているが、同一の組成をもった石器文化は検出されていないのである。しかし、沿海州南部のシホテアリン山脈東麓ウスチノフカ遺跡下層から発掘された石器文化は、あきらかに前期白滝文化のものと同一の組成をもっている。A・Π・オクラドニコフによれば、その年代は、一万五〇〇〇年から二万年前に考えられるという。したがって、前期白滝文化の段階には、前の小型剝片で作られるナイフ形石器の時期と異なり、文化的には沿海州につながる北に開いた様相がよみとれるだろう。もちろん、こうした現象は、宗谷海峡が依然として陸橋のままであり、北海道が沿海州からサハリンを含む大陸の一部であったことも密接に関係しているのであろう。

3 台形石器と細石刃の出現

前期白滝文化の次には、中型石刃と荒屋型彫刻刀、そして細石刃を伴うトワルベツ(峠下)文化があらわれる。最近、北海道南西部で、この時期の良好な遺跡がニカ所、北海道埋蔵文化財センターの手で発掘されている。その一つ、渡島管内知内町湯の里4遺跡では、トワルベツ文化の石器群に伴って台形石器が出土した。これは、本州の先土器文化から持ちこまれたのではないかとみられるような小型の台形石器で、二点検出されている(図1)。ここでは黒曜石水層による年代測定値でいえば13800±400 B.P.が得られた。また、石器の形態からもたれていた予想に反して、この台形石器の素材の黒曜石は、本州東北部産のものでなく、北海道の後志管内赤井川産のものが使用されていることが判明した。

従来、台形石器は、西日本それも九州に主として分布し、ナイフ形石器が広がっていた本州東北部にはまだ断片的な資料しかなかった。最近発見された秋田県河辺町風無台遺跡のような台形石器がセットで検出され、人間集団そのものの移住を考慮しなくてはならないケースを除き、通常のこの種の石器は西方から何らかのルートで東日本の先土器時代人の手に渡ったものと考えられていた

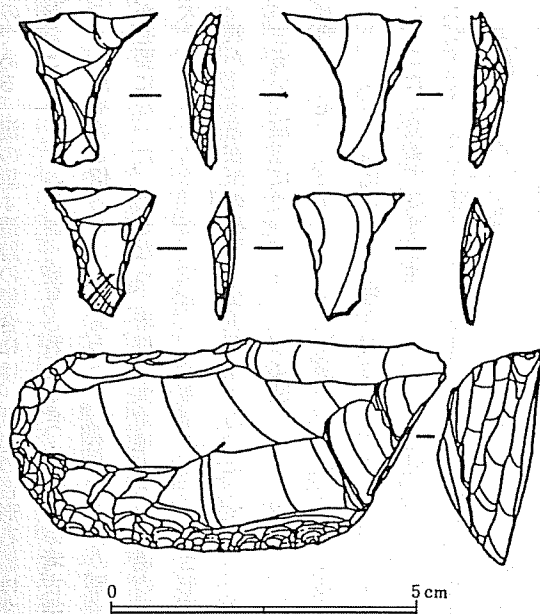


図1 湯の里4遺跡発見の台形石器と細石刃核
畑宏明「湯の里4遺跡の台形石器」1984年、図3より改変。

のである。湯の里4遺跡の場合には、問題の台形石器は北海道のトワルベツ文化の石器組成のなかに伴出するという形をとった。この石器が発見されたとき、大部分の考古学者は、その形態や製作手法からみて、これが本州からもちこまれたものと信じたほどであった。しかし、素材の原産地が北海道と判明してみると、この意見とは異なった解釈が必要になった。なぜなら、素材の供給地からみて湯の里4遺跡の台形石器は、北海道のなかで製作された可能性が大きいからである。だとすれば、北海道のどこかに台形石器を基本的石器組成のなかにもつ人間集団が存在していて、それが北海道在来の集団と交流関係があったとするか、あるいは、台形石器をもつ本州の集団から、きわめて少数の移住者が北海道にやってきて土着集団のなかに混住し、地元の素材で石器を製作したと考えなくてはならない。まだ、資料が不足であるが、湯の里4遺跡の場合は、台形石器の伴出状況からみて後者の例だと考えておきたい。

トワルベツ文化の出自系統に関しては、まだはっきりしないことが多い。サハリンのソコル遺跡出土のものの一部が、これに関係する可能性があることは注目してよい。¹¹⁾ しかもソコル遺跡で発見された石器のうち黒曜石でつくられたものは、母材の原産地が北海道の白滝村であることが判明している。興味をひくのは、この種の石器文化が、本州では発見されていないということである。さきにも述べたが、この時期の本州には、台形石器や小型ナイフの文化が継起していたとみられている。湯の里4遺跡の伴出でたしかめられたような細石刃と台形石器の伴出関係が確実だとすれば、日本列島のなかにおける細石刃使用の伝統は北海道から始まることになる。これは、北海道がユーラシア北部における細石刃文化の発生と展開に密接に結びついていたからであろう。つまり、トランスバイカル地域で出現したといわれる細石刃文化の展開の過程で、日本列島の中では北海道の地にもっとも早くその影響があらわれたからではないだろうか。

4 細石刃文化とそのひろがり

一万三〇〇〇年前後の古さになると、後期白滝文化の札滑細石刃文化があらわれる。この石器文化の領域は、かなりの広さをもつことが知られている。北見管内、十勝管内に数遺跡が確認されているが、これとまったく同一の組成をもつものが、山形県大石田町角二山¹²⁾から発掘されているし、新潟県荒屋¹³⁾遺跡の細石刃文化もこの仲間にかい。

この時期の石器製作跡やキャンプなどのあり方の典型的な資料として、前にものべた札滑細石刃文化の例が目される。この細石刃文化では、細石刃核を作りだす素材として大型の両面石器を用意するのが特徴であるが、これを製作したとみられる大量の未製品・破損品とともに、膨大な量の石片の出土する地点が北海道内の黒曜石原産地付近から知られているからだ。北見管内白滝村の遠間^{とよま}H地点として名高い大型両面石器を出土した遺跡は、その好例である。ここからは、大量の石片とともに大型両面石器やその未製品、細石刃などが多数検出されている。一方、ほぼこれと同時に期のキャンプ・サイトである北見管内西興部町札滑遺跡からは二〇〇〇本ちかい細石刃と三個の細石刃核が発掘されたが、細石刃核の母材になる大型両面石器を製作するための大型の素材や、その製作過程でできる石片が発見されなかった。つまり素材原産地で生産された細石刃核の未製品が搬入されていたのである。若干時期は古くなるが、サハリンのソコル遺跡でも、明らかに白滝原産の黒曜石を使った細石刃核や削片が検出されていることから、これも北海道内にみられる素材の供給システムの一部に組み込まれていた可能性が強いことは、まえにも述べた。ところが、札滑細石刃文化と同様の石器組成をしめす山形県角二山遺跡からは、北海道原産の素材はまったく知られていない。ソコル、角二山両遺跡とも素材の産地である白滝村からの距離は大差がないのに、何故こうした違いがみられるのだろうか。ひとつの仮説は、角二山の人間集団は北海道の集団と所属する部族が異なっていて、接触の度合がうすいとする考えかたがある。もうひとつ、海峡問題との関連を重視する立場がある。第四紀地質学の資料からすると、津軽海峡の成立はきわめて古く、これに比べて宗谷海峡はあたらしい。すくなくとも、札滑細石刃文化の段階には、宗谷海峡はまだ陸橋でサハリンと接続していたのに、津軽海峡はすでに海として存在していたと考えられている。¹⁴⁾ この地

史的背景から、海をこえて文化やヒトの断続的な交流は可能であったのだが、海峡は北海道から本州への物流を阻害するフィルターとして機能する面もあったのではないかとみられるのである。

先土器時代のトウルベツ・札滑細石刃文化の領域は、時間的な流れの中で拡大・縮小をみせながら、おおまかには、東北日本からサハリンをふくみ、さらに極東の沿海州にかけて広がっていたとしてよい。おそらく、極東地域東部との類似が問題とされる他の細石刃文化についても、⁽¹⁵⁾同様な地史的背景が文化領域の広がりうえに重要な意味をもつものと考えられる。

三 縄文時代の開始

1 縄文時代早期の二つの流れ

本州各地で先土器文化にかわってあらわれるいわゆる縄文文化草創期の確実な資料は、北海道では未発見である。しかし問題をふくんだ資料もあり、今後の検討がまたれる。

北海道で発見されている現在もとも古いとみられる土器群として、貝殻文・条痕文・沈線文などを特徴的な文様とする段階のものがある。これらは、その文様や器形から細分されそれぞれ型式名がつけられている。⁽¹⁶⁾その分布は、主に海岸地域に集中の傾向をみせ、内陸部にはすくない。この土器群は、文様上の基本的類似性はともかく、器形では尖底を主流とする北海道南部グループのものと平底の北海道東部・北部グループのものとに大別される。

南部の尖底土器群でもっとも初期の段階に位置づけられているのは、渡島管内西股遺跡のものを代表とするノダツプI式土器である。⁽¹⁷⁾貝殻文・沈線文・連続爪形文・縄文を文様構成要素としてもつ。この型式が東北地方の蛇王洞

II式土器にちかものであることは、ほぼ一致した見解である。⁽¹⁸⁾この土器型式に伴出する石器は、長手の五角形鏃、トランシェ、ナイフ、打製石斧・すり石などで構成され、この地域の他の縄文土器諸型式に必ず伴出する、通常、石さじとして知られるナイフがない。

この時期より新しい貝殻文尖底土器群を出土する遺跡としては、渡島管内中野遺跡AおよびB地点のものがあげられる。⁽¹⁹⁾放射性炭素による年代測定では、A地点のものがB地点のものより若干古い。⁽²⁰⁾AB両地点とも、石器組成の上では基本的にはかわらない。つまみのあるナイフ、スクレイパー、擦り切り手法による磨製石斧、両面加工のナイフまたは石槍・石鏃・キリ、小礫の両端を打ち欠いた石錘など、これ以降の縄文文化の石器組成の核部分が出揃うことは注目すべきであろう。⁽²¹⁾

北海道東部および北部を分布域とする貝殻文・条痕文・沈線文などを特徴的な文様とする早期の土器群は、平底の器形をもつものが主流である。日高管内駒場、⁽²²⁾十勝管内下頃部、⁽²³⁾大樹、⁽²⁴⁾釧路管内オタノシケ、⁽²⁵⁾東釧路、⁽²⁶⁾沼尻、⁽²⁷⁾テンネルなどの諸遺跡から発見され、それぞれ型式名が付されている。それらの年代序列については、明確な層位関係がおさえられていないので、確定するにいたっていない。

伴出する石器の形態や組成は、あきらかに西部の貝殻文・条痕文をもつ尖底土器群のものと性格を異にするらしい。ごく少量であるが、彫器があり、西部のノダツプ式をのぞく縄文時代の全時期にみられる（つまみのあるナイフ）のないことが注目される。⁽²⁸⁾集落は比較的点在していて、長期にわたる居住を物語る遺跡はごくすくない。この点、⁽²⁹⁾西部の貝殻文・条痕文をもつ尖底土器群を伴う集落のほうが定住性が強く、平底土器群の集落は、より「漂浪的性格」が強いという。

北海道東部において沈線文・条痕文などをもつ平底土器群のなかでもっとも古く考えられている曉式土器については、伴出する石器組成のうえから注目しておかなければならない問題がある。以前から、この土器型式には細石刃

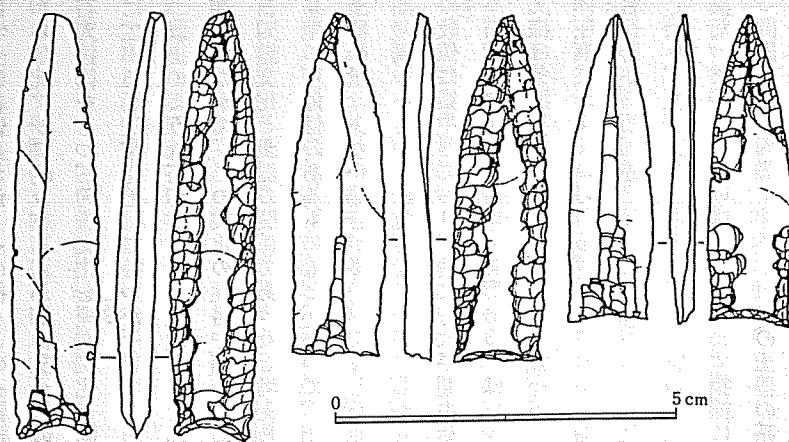


図2 湧別町市川Ⅱ遺跡出土の石刃鎌
北海道湧別町『湧別市川Ⅱ遺跡』1985年、より改変。

2 石刃鎌文化とその性格

北海道では、縄文文化早期中葉の土器群に時間的に並行しているが、それとは全く異質といってよい文化の存在が知られている。北海道北部・東部から中央部にかけて広がっていた石刃鎌文化がこれである。

石刃鎌文化は、その石器製作の基本的要素のなかに縄文文化一般にはみられない石刃技法があり、美麗な石刃を素材とする縦長の石鎌(石刃鎌)がもっとも特徴的な遺物としてあげられる(図2)。石刃から作出されるのは、石鎌だけではない。他の石器類も石刃を素材にしたものが多い。彫刻刀、エンドスクレイパー、ナイフなどほとんどがそうである。石刃鎌文化の石器をならべてみると、縄文時代のものとは石器製作技術や石器の形態が大きく異なり、先土器時代の間違えられるほどである。しかし、そうした異質的にみえる石器と同時に、先土器時代にはなかったもので、縄文時代にも普通にみられる遺物、擦切り手法で作られた磨製石斧・打製石斧・石鎌・矢柄研磨器、小礫を利用した石錘・石皿・凹石などの石器類が伴い、さらに量的には多くないが土器もある。この特殊な石器群は、一九四三年に斎藤米太郎によってはじめ

が伴出するといわれていた⁽³¹⁾。しかし、曉式土器のタイプ・サイトである十勝管内曉遺跡では、明石博志を中心とする研究グループが、その後の熱心な調査を続けたのにもかかわらず、細石刃の伴出については、否定的な資料が増加していた。曉遺跡で土器に伴出した細石刃といわれるものは、トウルベツもしくは峠下文化に分類される先土器時代のものの混入であった可能性がたかまってきた。ところが、同グループが中心となつてすすめた曉式土器をだす十勝管内八千代C遺跡の堅穴住居の発掘は、意外な結果をもたらすこととなった⁽³²⁾。ここでは、曉式土器に黒曜石の礫を素材とした石核からやや粗雑な石刃手法で剝離された石刃が伴出したのである。石器組成のうえでは石刃が主体を占めていたのであるが、石刃以外にもスクレイパーや石鎌が認められる。北海道東部で土器に確実に伴出する石刃として著名なのは、石刃鎌文化の遺物である。ところが八千代C遺跡では粗雑な石刃が存在するにもかかわらず、後述の石刃鎌文化の象徴である石刃鎌が認められない。また、通常、石刃鎌とともに発見される絡縄体圧痕文をもつ浦幌式土器もみあたらない。これはどうしたことであろうか。

この問題に関連する資料が、前述した駒場遺跡においても見出せる。駒場遺跡の堅穴住居PH-16とPH-7からは、曉式土器類似の土器を伴って石刃が検出されているのである。そこでも、曉遺跡と同様に石刃鎌の伴出がみられなかった。つまり北海道の東部には、後述する石刃鎌文化以外にも、石器組成のうえで縄文文化的色彩のうすい曉式土器の仲間が存在していた可能性がたかまってきた。ちなみに、これらの遺物を出土した八千代C遺跡の放射性炭素による年代測定値は、8140±170 B.P.および7770±950 B.P.、黒曜石水和層測定による年代値は、9400 B.P.である。

北海道の縄文時代早期のこれらの資料から、ひとつの見通しが得られる。それは、本州東北部につながるいわゆる縄文文化の性格を示すものと、北海道東部にひろがっていた縄文文化の性格のうすいものという二つの系列が存在することである。この現象は、とりもなおさず、縄文文化の北の境界をも暗示するものである。次項では、同じ早期の時代に位置づけられながら、もっと明確に縄文文化と性格のことなる石刃鎌文化をみてみよう。

て学会に報告された⁽³³⁾。その後、この石器群に注目した名取武光は斎藤の発見した浦幌村新吉野台を再度調査し、ここからは北アジア的な細石刃が櫛目文土器の系統をひく土器と伴出して出土したと報告している⁽³⁴⁾。当時、筆者も真正の石刃技術をもつ石刃鏃文化を縄文文化と同一グループ視することはできないと考え、この種の文化を縄文文化の北端に広がる周辺文化として扱った⁽³⁵⁾。

以上のような石刃鏃文化の位置づけをふまえ、その後の北海道における先土器文化や縄文文化初期に関する研究の進展のなかで、この文化の性格や編年をめぐって多くの議論がもたれている。その議論を複雑化させた原因の一つは、石刃鏃文化と土器の関係であったと考えられる。石刃鏃文化の遺跡のなかには、そこが一時的なキャンプであったり、墓地の可能性のあるものなどがあって、土器が伴出しない遺跡も少なくない。また、伴出が確認されている遺跡でも、土器の量は少ない場合が多い。こうした現象が石器形態の特殊性とあいまって石刃鏃文化の編年位置を縄文時代草創期に属するものと錯覚させている。しかし黒曜石水層と示されている年代は、通常七〇〇年前から七五〇年前の数値に集中しており、縄文時代早期中葉以降に位置するものであることは確かである。

石刃鏃文化の土器は、鉢形あるいはコップ形で、口縁は突起がなく平縁が普通である。大型の土器はみられない。文様は条痕・擦痕、無文のものが多く、口縁かくに細い縄を軸にまきつけた施文具を器面に軽く押しつけた絡縄体圧痕文がよくみられる。発見される土器のほとんどは、この種のものである。かつて、名取によって十勝管内吉野台遺跡から石刃鏃と伴って発掘され、浦幌式土器と命名されたのもこの仲間である。ほかに、ヘラの先で刺突文を施したり、型押文や円形のスタンプ状の文様をもつものが、僅かに知られている。だが、こうした文様のちがう土器が、異なった時期あるいは系統をしめす指標になりうるかどうか、決定する資料に乏しい。

問題は、石刃鏃に伴うこれらの土器の系統と編年位置である。まだ研究者によって細部に若干のちがいはあるが、その年代観と文化の特異性については、前述した見解とおおまかのところで一致している。また、その系統について

は自然生態系が北海道に共通性の多い中ソ国境のアムール河中流域に注目、この地域で発見される石刃鏃の代表例としてノヴォペトロフカ遺跡のものをとりあげ、北海道のものと石器組成上では同一、土器についてはモチーフの構成に強い類似がみられる、とはっきり指摘する見解もある⁽³⁶⁾。

石刃鏃そのものの分布はきわめて広い。若干の形態差と共伴する遺物の違いはあるが、モンゴル・中国北部を含むアジア大陸一帯、西シベリア、ウズベック、トルクメンなどにかけての広大な地域に分布している。しかし中国東北部以南の朝鮮、それに北海道をのぞく日本の各地からは発見されていない。北海道に隣接する地域では、サハリンのタコエ⁽³⁷⁾、中国黒竜江省新開流⁽³⁸⁾、前出のアムール河中流域のノヴォペトロフカなどの諸遺跡から良好な資料が発見されている。こうした分布のあり方からみて、北海道の石刃鏃が北東アジアにつながるものであることは明らかである⁽⁴⁰⁾。これらの資料は、北海道にみられる石刃鏃をもつ文化が、あきらかに北方ルートで極東の新石器時代の文化に密接に関連していたことをものがたっている。くり返すようだが、石刃鏃文化の基本的な石器組成や石器の製造技術は、どの縄文文化早期のものとも異なる。両者の文化遺物にみられる性格の差は、単なる文化変容として解釈できるものではない。とすれば、北海道の石刃鏃文化は、極東にひろがっているこの種の文化が、縄文文化の人々に影響をあたえた結果生まれたものと説明することは困難であろう。冒頭にも述べたように、縄文の世界にとっては、石刃鏃文化は異質の存在であった。つまり、石刃鏃を出土する遺跡は、北方から北海道の東北部に南下してきた人間集団が残した痕跡なのである。

こうした小集団の北海道への移動をひきおこした原因や生業については、まだ資料があまりにも貧弱で、議論できる段階にない。だが、断片的な証拠であるにしろ北海道における石刃鏃文化の存在は、縄文時代早期のある時期における縄文文化圏の北端が確実に北海道内にあり、これを通じて、東日本の縄文文化と極東の初期新石器時代文化との間の直接の関連を考える手がかりをあたえるものなのである。

四 北海道における初期農耕の痕跡

1 縄文文化最盛期の原初的農耕

縄文早期末から前期にかけては、いままですべてきたような東と西の境界をこえて、はじめて斉一性にとんだ土器群が北海道全島に広がったことが知られる。釧路市の東釧路貝塚出土の遺物を指標とする、絡縄体圧痕文や組紐圧痕文を特徴的文様としてもつ東釧路Ⅳ式土器群がこれである。伴出する石器の組成は、北海道南西部の縄文時代早期の貝殻文尖底土器群のものとはほぼ等しく、その後の縄文文化各時期にみられる石器組成の基本的なパターンを示す(図3)。しかしながら、この時期の集落についても、中規模のものは南西部に多く、北海道東部には小規模のものが多く。だが、遺物のうえにあらわれたこの斉一性は、そうながくは続かない。縄文前期中葉から中期にかけて、本州東北地方北部と同様の円筒式土器群が北海道南西部に広がってくる。この時期の前半、東部地区には繊維を胎土に混入する縄文・捺糸文・押型文などの文様をもつ尖底あるいは円底の土器群が、また、若干地域と時代を異にして胎土に繊維を含まない平底・筒形の押型文土器群がひろがり、やがて筒形の器形と縄文、刺突文などをもつ北筒式土器(北海道式円筒土器の略)にとつてかわられる。集落は南西部の円筒式土器をもつものと東部の北筒式土器をもつものには大型のことが多い。しかし遺物の出土量は、南西部のほうが圧倒的に多い傾向がみられる。石器は、所属・系統の明らかでない平底・筒形の押型文土器のグループをのぞき、いずれも縄文各期に一般的な組成をみせるが、両地域ともに北海道式石冠(石杵)が多くみられるようになる。ただし、この種の石器は、量的には北海道南西部の円筒土器の文化圏に多い。その傾向は石皿については、さらに顕著である。

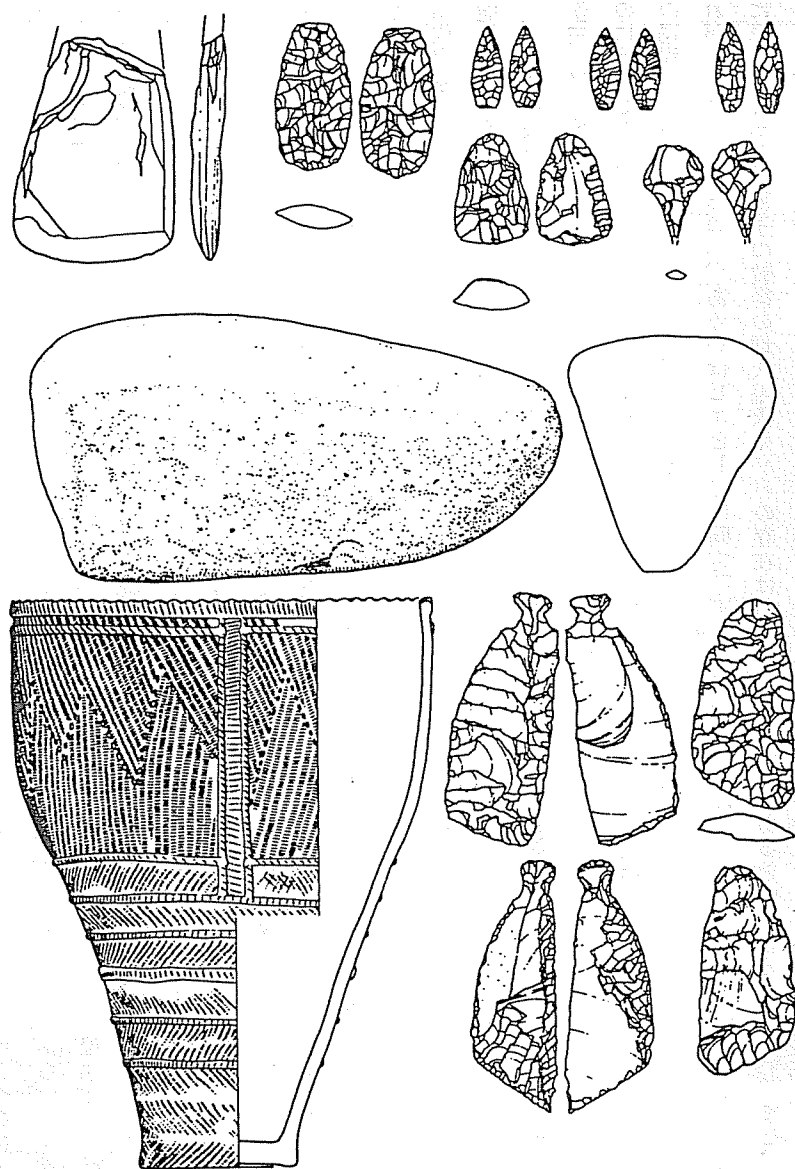


図3 東釧路Ⅲ-Ⅳ式土器(千歳市美沢川遺跡群出土)に伴出する石器類
北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群』1982年, より改変。

石皿は、すり石(グライインディング・ストーン)とセットで、現在のすり鉢や石臼のような機能をもつ道具として理解されており、本州中央部から東北にかけての縄文時代遺跡にかなり一般的に認められるものである。北海道における石皿と石冠の増加現象については、この時代が、いわゆる花粉帯でいうRⅡの層準にあたり、現在よりも暖かでナラ属の樹種が増加することが判明しているもので、本州側の研究者が主張している「縄文文化の生活の基本的項目」である堅果類・根裁類の加工に使用された可能性を指摘する研究者が多い⁽⁴³⁾。そうだとすれば、この種の石器が生態的に本州北部にちかい北海道南西部に多いのは、当時の植生からいって当然かもしれない。

だが、縄文時代前期から中期にみられる北海道内の文化様相のちがいを理解する方法として、注目されるべき別のアプローチもある。それは、渡島半島の縄文時代の調査の際に実施された、浮遊選別法による植物種子の採集調査からもたらされた。まず、第一には、渡島管内ハマナス野⁽⁴²⁾遺跡において、縄文時代前期末の竪穴住居の床面から炭化したソバ種子が検出されたことである。この結果は当初疑問視されていたが、出土層準が確実なこと、その後青森県の田代⁽⁴³⁾湿原のボーリングによって得られた¹⁴C年代で800 B.P.ゾーンからソバ花粉が検出されたことなどで、実在の可能性がたかまった。

さらに興味をひくのは、同じ住居の床から、集中して大量のイヌビエ(*Echinochloa crusgalli* または *Panicum crus-galli*)らしき炭化種子が発見されたことだ。しかも、これらの種子は、炭化による膨張を計算にいれても、現生のものに比較して粒径が二〇パーセントほど大きい。この現象は、あきらかにこの植物が馴化されたものか、あるいはその過程であることを物語っている⁽⁴⁴⁾。この炭化種子についていえば、報告者はイヌビエと記載しているが、筆者は、それがイヌビエであるのか、あるいはヒエとしては同定不可能なのかどうかについては、にわかには決定しがたいように思う。しかし、種子の粒径の増大現象やソバの存在は、きわめて示唆的であるといわねばなるまい。また、いまのところ、この種の植物遺存体が北海道東部の遺跡から検出されたという報告がないことにも注意してよい。つまり、

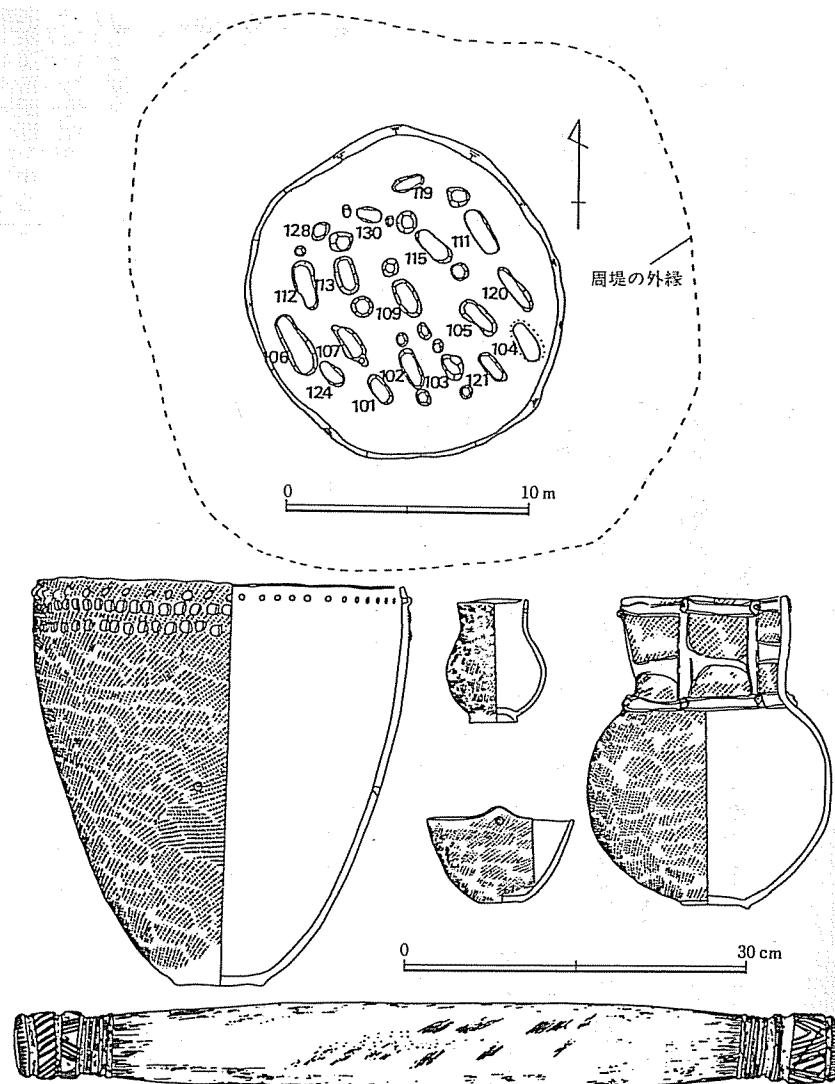


図4 千歳市美沢川遺跡群の周堤墓とその遺物
北海道埋蔵文化財センター『新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告』付篇「美沢川流域遺跡群」1982年、より改変。

北海道南西部を中心とする地域には、ソバやイヌビエなどの馴化による利用(原初農耕)が、ある程度のウェイトをもっていた可能性を考慮にいれなくてはならない情勢になったわけだ。石皿や磨石の増加現象も、これらの原初農耕活動と関連させて検討することが必要かもしれない。

また、北海道の縄文時代後期後半から晩期初頭の時期に、規模が最大で外径七五メートル、内径で四五メートル、高さ三メートルにもおよぶドーナツ状の土堤をめぐらした周堤墓の存在が知られている。その分布は道央の石狩苦小牧低地帯に中心があるように見られる。東部にはかぎられた地域にしか発見されていない(図4)。木村尚俊の指摘するように、これらの大型遺構の存在を可能ならしめた理由のひとつに定住と食糧資源の安定供給を背景とする人口集中があるとすれば、その分布の中心が清冽なサケ・マス河川をもち、広範な扇状地あるいは低位段丘のひろがっている地帯にあることの重要性を指摘しておきたい。ちなみに、北海道にみられる広大な沖積平野のほとんどはかつては湿原地帯であって、前述の条件を具えた地域はごくかぎられてしまうのである。現在みられる大水田地帯は、こうした湿原を客土して、明治時代から作りあげられた、世界にも例のない湿原利用の成功例であることを想起してほしい。つまり、過去において、畑作地帯としても最高の条件をもち、なおかつ定期的に潮上する大量のサケ・マスの利用できる地帯に大型の周堤墓の分布が集中していることは、けっして偶然ではないだろう。

福井県鳥浜貝塚の縄文文化前期の層準からも各種の栽培植物が確認されているように、日本列島の縄文文化の大部分の時期と地方で原初的な農耕が存在していたことは、もはや否定できない。この事実が容認され、いままですべてきた北海道南西部における原初的な農耕存在(原始的な農耕ではない)の仮説が正しいとしても、なおかつ北海道東部は、石槍や石製モリ先など狩猟・漁撈具などの出土比率の高さや、花粉や植物遺存体の様相からおして、その圏外にあったと考えるほうが説明しやすいであろう。

2 稲作文化の圏外

本州東北地方の縄文時代晩期の亀ヶ岡文化は、西日本の前期弥生文化の成立から、おそらく一、二、土器型式のずれで急激な展開をみせ、稲作農耕を受容し、初期農耕社会として変革した。こうして始まった東北地方の弥生文化は、その多くの要素を亀ヶ岡文化から踏襲し、きわめて強い地域色をもちながら定着した。⁽⁴⁵⁾

一方、土器型式の上からいって北海道の縄文文化晩期は、南西部の地域では亀ヶ岡式土器そのものの、つまり亀ヶ岡文化圏に属し、それより離れるにしたがって亀ヶ岡文化の影響がうすれ在地的要素が強くなるというのが、ごく一般的な見解である。たしかに、渡島半島と東北地方北部に限っていえば、土器の変遷や石器組成などからみても、あきらかに両地域は一衣帯水の文化圏を形成していた。⁽⁴⁶⁾では、同じ文化圏内に包括されていた東北地方北部が初期農耕社会化した際に、北海道の縄文文化にはどのような変化が認められるであろうか。この問題を最初に明確な形でとりあげたのは、山内清男が一九三九年に発表した見解である。山内はこの時代を「基本的には稲作農耕をもたず、縄紋時代とほぼ同じ生活が続いていた縄紋式以後の縄紋の多い土器型式」の存続する段階としてとらえ、縄文文化という概念を与えた。⁽⁴⁷⁾以来、この名称は、おおまかに本州の弥生時代にあたる北海道の時代をあらわす概念として、多少の変形あるいは拡張をうけながら現在まで使用されている。最近にいたって、この段階における生産手段や生活が、縄文時代とほとんど変わらず、ただ以前と異なり少量の金属製品を入手使用することだけが大きな特徴だというなら、縄文文化として縄文文化から分離独立させるよりも、むしろ縄文文化末期の一段階として扱うべきだとする意見も生まれてきている。

いわゆる縄文文化は、その母体となったそれぞれの地域の晩期縄文土器の伝統を強くひきついで、三・四の文化圏にわけられる。縄文時代の晩期に東北地方の亀ヶ岡文化の領域であった北海道南西部は、亀ヶ岡式土器末期の伝統

を示す恵山式土器群が、それ以外の地域には北海道独自の地方的な複数の土器群がみられるといった様相をみせる。⁽⁵⁰⁾ 縄文時代の土器群は、その末葉にちかくなると全道的に斉一性がみられるようになる。いわゆる後北C1式—C2式土器がこれである。

きわめて興味深いことに、この後北式土器の仲間が津軽海峡をこえ、本州東北部にまで分布していることが判明している。北海道系の後北式土器の本州におけるありかたは、在地の土器群に客体として伴出する場合と、独自の小キャンプ的遺跡として存在する場合がある。前者のケースとしては、新潟県内越遺跡⁽⁵¹⁾があげられる。ここでは、弥生時代最末期あるいは古式土師器に後北C1式土器が伴出した。同様に岩手県盛岡市永福寺山遺跡⁽⁵²⁾の場合、後北C2式土器が古式土師器にほぼ伴出の形をとっていた。後者のケースとしては、宮城県北部で興野義一が発見した後北D県などの出土例は、後北C1式およびC2式土器が、弥生時代末あるいは古式土師器の時期に存在することを物語っており、この時期の年代観を決めるうえからも注目される。

同様に北海道側においても、本州側の弥生時代末の土器が、函館市郊外の七飯町聖山遺跡⁽⁵³⁾をはじめとして南西部の諸遺跡から断片的に発見されはじめている。最近では、札幌市教育委員会による札幌駅構内の発掘調査で、完形の弥生土器が2個、後北C1またはC2式土器に伴って検出された。それらは、すべて東北地方の弥生時代末期の天王山⁽⁵⁴⁾や赤穴遺跡などにみられる捺糸文や交互刺突文をもつ弥生土器の仲間であった。したがって、客体的存在としての弥生土器は、北海道の後北式土器が南下したのとは逆に、本州側から北にその分布域を拡大していた。その理由は何でとを推定させる。後北C2式土器に関連して、もうひとつ注意しておかなければならないことがある。それは、サハリン南部から北海道北部にかけて広がっていた鈴谷式⁽⁵⁵⁾土器群である。この土器群は、第二次世界大戦前に実施された

サハリン南部の鈴谷貝塚の調査で、伊東信雄によって命名されたものだ。同種の土器群を主として出土する遺跡は、泉靖一らが宗谷管内オンコロマナイ遺跡の発掘調査でも確認している。土器は単純な深鉢で円底または尖底、捺糸原体をおしつけて、直線や波状あるいは馬蹄形の文様をあらわすものが特徴的である。また、胴部にはしばしば縄文の施文がみられる。分布の主体はサハリン南部であると推定されるが、この種の土器群も北海道北部から道央部にかけて、しばしば客体として分布し、後北C式土器と平行関係にあることが確かめられている。鈴谷式土器群は、おそらく後述するオホーツク文化の母体のひとつになると考えられるが、その文化の所属については、縄文文化の最北のグループに属させようという見解、縄文段階の周辺文化あるいはオホーツク文化の初期のものに含ませる見解などがあり、意見の一致をみていない。

五 オホーツク文化と擦文文化

1 南下してきた漁撈民

七世紀ごろから、北海道北部の沿岸地帯に北東アジア的色彩の濃い漁撈民の文化が侵入してきた。この文化は、その後オホーツク海沿岸に沿ってひろがり、土着の縄文文化、あるいは後述する擦文時代の文化とは、きわめて異なった生活を展開していた。オホーツク文化とよばれるものがこれである。土器の文様や器形もそれまでの北海道在地のものとは異なっている⁽⁵⁶⁾。石器の使用はまだ普遍的であるが、同時に金属製品も豊富にもっていた。各種の鉄製品のほか、青銅製の銚、鈴、鐸、帯飾などもあり、玉製耳環などユニークな装飾品も知られている。イヌのほかにブタの飼育のあったことが注意をひく。住居も特異である。その典型的なものは、五角形あるいは六角形の平面形

2 蝦夷土師期と擦文期(エミシ・エゾ文化)

八世紀の中葉になると、当時の本州東北地方北部にみられた土師器を特徴とする物質文化が、ほとんどそのままの様相で北海道南西部から石狩・苫小牧低地帯地域に出現する。この時期を境にして北海道においては、縄文時代以来

オホーツク文化の生業技術体系の導入によって優位にたった擦文文化生活圏の拡大によるなど聞くべき見解が多い。

その終末の様相については、大井晴男のいうように北海道南部から中央部にかけての地域に本州勢力の進出、あるいは山浦清の指摘するように擦文文化人の海岸部への進出によってもたらされた緊張関係の発生と、擦文文化人によるオホーツク文化の生業技術体系の導入によって優位にたった擦文文化生活圏の拡大によるなど聞くべき見解が多い。

こうした侵入者の残したオホーツク文化と、在地の文化との関連はどのように考えられるだろうか。まず、前期のオホーツク式土器を出土した宗谷管内利尻島亦稚(またわかし)貝塚では、七世紀末から八世紀初頭とおもわれる土師器が伴出している。⁽⁵⁷⁾ また網走管内二ツ岩(ふたついわ)ではオホーツク式土器中期といわれるソーメン文土器の仲間に、北海道大学サークル会館遺跡の資料を指標とする八世紀末あるいは九世紀前半の土師器が伴出した。⁽⁵⁸⁾ したがって、在地の縄文時代末葉の段階から後述する擦文時代の中期まで、この文化が時間的に平行して存在していたことは確かである。そして、擦文時代後期前半になると、圧倒的多数に増加したこの地域の擦文文化人のなかに吸収され、オホーツク文化は姿を消す。

をもつ堅穴住居で、長径が一〇―一五メートル、床面積は七〇―一〇〇平方メートルもある。中央に方形石組炉がきられ、それを囲んでコの字形に粘土の床がつくられている。この床と住居の壁までの間には、木製のベンチが作りつけになっている。また、住居の一隅に、あたかも祭壇のような形にヒグマを主としたキツネやトド・アザラシなどの頭骨が積み上げられている。ブタ飼育をはじめ、この時期の文化要素をみると、かなりのものはサハリン經由で沿海州・黒竜江流域からもたらされた、靺鞨(もくはく)女真(じゆん)系統の文化に由来するものであることは、研究者の一致した見解となっている。菊池俊彦はこうした物質文化の周辺諸地域との比較検討と中国側の古記録とを詳細に対比し、オホーツク文化をもたらししたのは、古

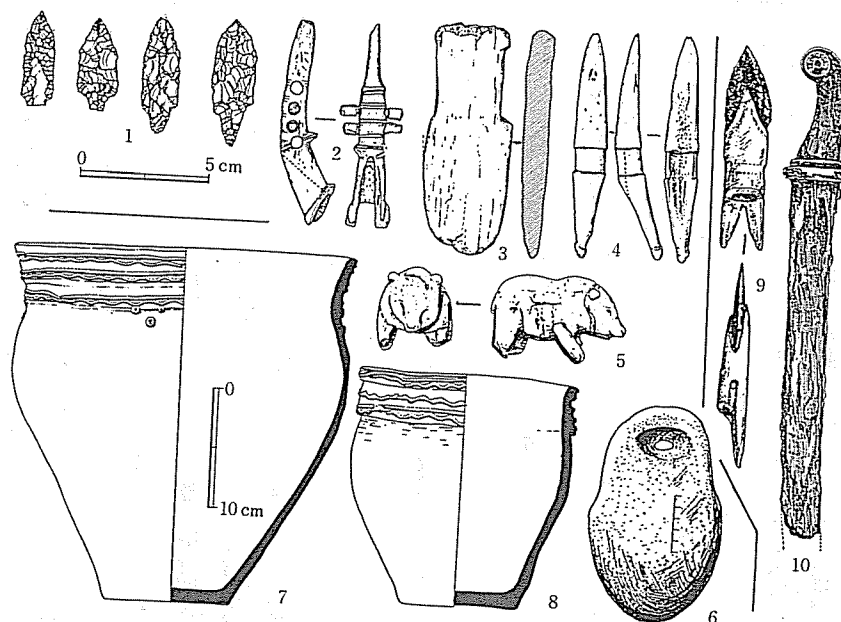


図5 オホーツク文化の遺物(縮尺不同)

1. 石鏃 2. 骨製ナイフの柄 3. 鯨骨器 4. 骨製鈎 5. 骨製クマ像 6. 石鏃 7, 8. オホーツク式土器 9. 黒曜石製先端をもつ骨製鈎 10. 鉄製ワビ手刀。
1, 6, 7, 8. 根室管内松法川北岸遺跡出土(『羅臼町文化財報告』1984年, より改変) 2, 3. 北見管内トコロチャシ2号堅穴出土(東京大学『オホーツク沿岸・知床半島の遺跡』下巻, 1964年, より改変) 4, 5. 北見管内トコロチャシ1号堅穴出土(同前) 9, 10. 網走管内モヨロ貝塚出土(米村喜男『モヨロ貝塚資料集』1950年, より改変)

2 蝦夷土師期と擦文期(エミシ・エゾ文化)

八世紀の中葉になると、当時の本州東北地方北部にみられた土師器を特徴とする物質文化が、ほとんどそのままの様相で北海道南西部から石狩・苫小牧低地帯地域に出現する。この時期を境にして北海道においては、縄文時代以来

その終末の様相については、大井晴男のいうように北海道南部から中央部にかけての地域に本州勢力の進出、あるいは山浦清の指摘するように擦文文化人の海岸部への進出によってたらされた緊張関係の発生と、擦文文化人によるオホーツク文化の生業技術体系の導入によって優位にたった擦文文化生活圏の拡大によるなど聞くべき見解が多い。

こうした侵入者の残したオホーツク文化と、在地の文化との関連はどのように考えられるだろうか。まず、前期のオホーツク式土器を出土した宗谷管内尻島(さかしま)亦稚(またこ)貝塚では、七世紀末から八世紀初頭とおもわれる土師器が伴出している。⁽⁵⁷⁾ また網走管内二ツ岩(ふたついわ)ではオホーツク式土器中期といわれるソーメン文土器の仲間に、北海道大学サークル会館遺跡の資料を指標とする八世紀末あるいは九世紀前半の土師器が伴出した。⁽⁵⁸⁾ したがって、在地の続縄文時代末葉の段階から後述する擦文時代の中期まで、この文化が時間的に平行して存在していたことは確かである。そして、擦文時代後期前半になると、圧倒的多数に増加したこの地域の擦文文化人のなかに吸収され、オホーツク文化は姿を消す。

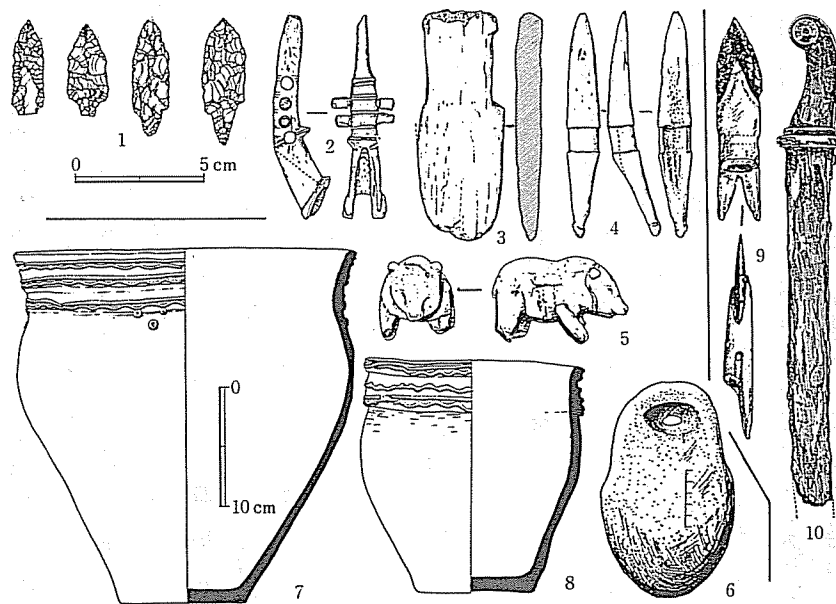


図5 オホーツク文化の遺物(縮尺不同)

1. 石鏃 2. 骨製ナイフの柄 3. 鯨骨器 4. 骨製鈎 5. 骨製クマ像 6. 石鏃 7, 8. オホーツク式土器 9. 黒曜石製先端をもつ骨製鈎 10. 鉄製ワラビ手刀。
1, 6, 7, 8. 根室管内松法川北岸遺跡出土(『羅臼町文化財報告』1984年, より改変) 2, 3. 北見管内トコロチャシ2号堅穴出土(東京大学『オホーツク沿岸・知床半島の遺跡』下巻, 1964年, より改変) 4, 5. 北見管内トコロチャシ1号堅穴出土(同前) 9, 10. 網走管内モヨロ貝塚出土(米村喜男『モヨロ貝塚資料集』1950年, より改変)

をもつ堅穴住居で、長径が一〇―一五メートル、床面積は七〇―一〇〇平方メートルもある。中央に方形石組炉がきられ、それを囲んでコの字形に粘土の床がつくられている。この床と住居の壁までの間には、木製のベンチが作りつけになっている。また、住居の一隅に、あたかも祭壇のような形にヒグマを主としたキツネやトド・アザラシなどの頭骨が積み上げられている。ブタ飼育をはじめ、この時期の文化要素をみると、かなりのものはサハリン經由で沿海州・黒竜江流域からもたらされた、靺鞨(もくはく)女真(じしん)系統の文化に由来するものであることは、研究者の一致した見解となっている。菊池俊彦はこうした物質文化の周辺諸地域との比較検討と中国側の古記録とを詳細に対比し、オホーツク文化をもたらししたのは、古

続いていた生活伝統のなかからかなりのものが消失し、新しい伝統のめばえがはじまる。たとえば定形化した石器の伴出がほとんどみられなくなる。これは金属製品の流通量が以前に比べて急増し、鏃とかスクレイパーなど限られた石器以外の利器や工具が、金属製品におきかえられたからだ。住居のスタイルにみられる変化もそのひとつである。それまでの中央に炉を有する竪穴住居はほとんど姿を消し、かわりに竪穴住居の壁に竈をとりつけ、煙道を外にひきだすタイプの住居様式が一般化する。いうまでもなく、この住居様式は、本州の土師器住民の住居そのもののコピーといつてよい。

この段階の文化は、前期・中期・後期に三分するのが分りやすい。おおまかにみて前期はⅠ―Ⅲの三段階に分類編年される。Ⅰ期は、土師器の坏、甕、壺、浅鉢、高坏などの、いわゆる土師器がその土器構成の中心となる。Ⅰ―Ⅱ期の段階には、通常、須恵器が伴出せず、Ⅲ期になると須恵器の伴出が一般化してくる。また、Ⅰ―Ⅱ期のものには円形刺突文、沈線文などのいわゆる北海道在来の縄文文化の伝統をひく北大式土器の伴出する場が多い。その量的あるいは北大式土器の細分型式については、地域によって違いがあるように見受けられる。北海道南西部から石狩・苫小牧低地帯においては、土師器が主体となるが、その他の地域では、関係が逆転する場合もあるらしい。⁽⁶²⁾つまり北海道土着の土器伝統のなかに、本州のものが「かなりの勢い」で、はいりこんできたかのようにみられるのである。この状況は、前に述べた西暦四―五世紀の縄文時代後半の遺物が、本州北部にモザイク状にはいりこんでいたのに、やや似ているところがある。しかし、西暦八世紀のこの段階においては、両地域の関係が全く逆転している。つまり、文化の流れは、南から北へと動きはじめたのである。

中期になると、ロクロ整形の土師器が認められるようになる。とくに坏の製作にその傾向が顕著で、ごく少数ではあるが甕の整形にも用いられている。このような本州北部との結びつきの強い前期と中期の段階を「蝦夷土師期」としてよんでおく。奇妙なことに、この中期末を境にして、それ以後の北海道の土器製作技術からロクロの使用が全く

欠落してしまう。こうした変化が顕著になるのは、九世紀末からである。それ以後、北海道のなかで普遍的な土器製作が停止されるまでの間を、擦文時代後期あるいは、擦文期とよんでおこう。これまで擦文式土器としてとりあげられていた大部分の土器群は、この範疇に属するものとしてよい。この時期も、土器型式の変化で最低Ⅰ―Ⅲ期に区別できるが、詳細については、煩雑にすぎるので、ここではふれない。

擦文期の最末期には、内耳土鍋の伴出するケースがままあるらしいが、中世粗陶や輸入陶磁器の伴出した例は皆無である。後志管内神恵内洞穴^{かむえな}の例では、中世粗陶を含む文化層と層位関係をもつて発見されたという(石附喜三男の教示による)。したがって、おおかたの研究者の認めるように、擦文期は平安時代末―鎌倉時代初頭には終りを遂げるものとみられる。

3 土師器化の原因

ところで、縄文時代後半にみられた文化の南下と、擦文時代前期からはじまる本州東北部の文化の急激な北進という、ある意味ではドラスチックともいえるこれらの現象は、どのような背景を考えると説明できるのだろうか。この問題を説明する仮説として、中国や日本の古代国家をはじめとするさまざまな人間集団の経済的な要求という歴史に普遍的な要因が大きいとする見解がある。⁽⁶³⁾しかし、最近の資料をみるかぎり、その要因はもう少し複雑である可能性がでてきた。つまり、四―五世紀にみられた南下現象は、人間の経済的要求もさることながら、その行動を加速するのに当時北半球にみられた気候の寒冷化が大きな意味をもっていたのではないだろうか⁽⁶⁴⁾。

一方、西暦八世紀頃からの北進現象を、どのように説明するか。まず、七世紀頃よりはじまった気候の暖化にともなつて、東北北部の人間集団と縄文時代から密接だった北海道南西部から中央部にかけての人間集団のなかに、すでに本州北部ではじまっていた新しい生活技術——つまり稲作を除く農耕——が導入されはじめていた。しかし、それ

これら栽培植物のもちこまれたルートについては、本州ルートが主であると推定されるものの、大陸側からの直接的な日本海ルートなどについても検討が必要である。見方をかえれば、縄文時代以来、しばしば本州東北部と同じ文化圏のなかに含まれたことのある地域に、農耕の広まったことは興味深い。だがその一方で、北海道東部、とくに釧路、根室、北見の各支庁での調査をみると、遺跡から少量の栽培種の種子の発見はあっても、農耕の存在をうら

落地帯であった。

関する考え方の訂正が必要になってきている。つまり、この地帯は、ムギとアワ・ヒエを主体とする原初的な農耕集落地帯であった。

これら栽培植物のもちこまれたルートについては、本州ルートが主であると推定されるものの、大陸側からの直接的な日本海ルートなどについても検討が必要である。見方をかえれば、縄文時代以来、しばしば本州東北部と同じ文化圏のなかに含まれたことのある地域に、農耕の広まったことは興味深い。だがその一方で、北海道東部、とくに釧路、根室、北見の各支庁での調査をみると、遺跡から少量の栽培種の種子の発見はあっても、農耕の存在をうら

以外に、こうした北進現象あるいは本州化が急激に発生した裏には、本州東北部に住む同族との紐帯を強化しなくてはならない重要な政治経済的理由が発生していた可能性がある。

この問題をとく鍵のひとつが、西暦九世紀代に位置づけられる擦文時代中期の代表的な遺跡、石狩管内札幌市サクシュコトニ川遺跡の調査結果からうかがえるように思われる。サクシュコトニ川遺跡は、北海道大学埋蔵文化財調査室の手で発掘されたのだが、その際、当時の住居の床面と集落の生活面の土壌が一〇トンほど採集され、なかに含まれる炭化物が徹底的に拾いだされた。その結果、ここから炭化した一〇万粒をこすムギにアワ・ヒエ・リョクトウ・アズキ・ウリ・コメと多数の畑作雑草が検出された。従来、この時期を含むいわゆる擦文時代には、家庭菜園ほどの小規模かつ補助的な農耕しかないといわれていたのである。この調査をきっかけにして、その後、北海道西部の遺跡からは同種の栽培植物種子の発見があいついでおり、北海道の擦文時代人の生活のなかにおける農耕のウェイトが、想像以上にたかいことが判明してきた。サクシュコトニ川遺跡の調査結果をはじめとして、正式の方法で詳細な発掘が実施された遺跡の最近の資料によるかぎり、北海道西部から中央部にかけての地域においては、農耕のウェイトに

図6は日本と中国の古気候変化を曲線で示してある。中国の資料は古記録はかをもとにして竺可楨が作成したもの。日本の資料は尾瀬ヶ原の中央部から採取された泥炭の柱状サンプル中に認められる樹木花粉の出現比を百分率で扱い、その中に基準となるハイマツの花粉出現率を気候変化のインディケーターとしている。中央軸の示すパーセントの数値は、ほぼ現在と考えられる地層中のハイマツ出現率である。

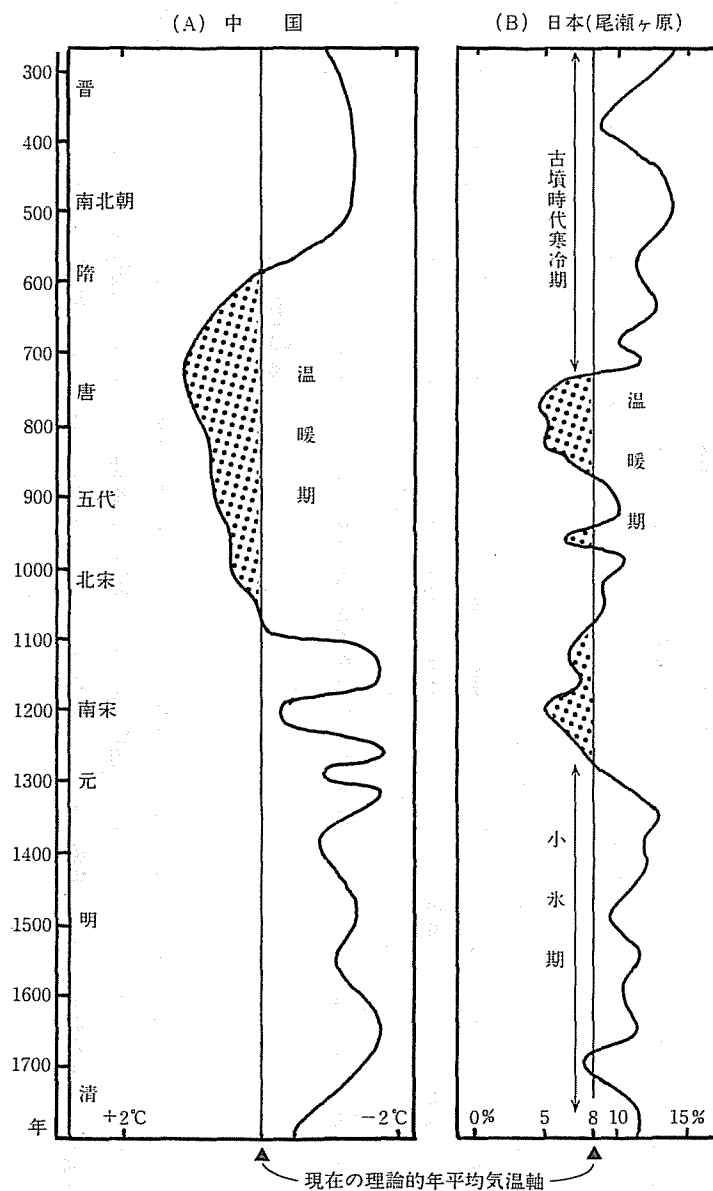


図6 日本と中国の古気候変化曲線

けるような資料がでてこない。おそらく、これらの地域の擦文時代の農耕は、当初からいわれていたように痕跡程度にしかなわっていなかったのであろう。この仮説は、現在の地理環境からみても妥当なところとして、うなずけるであろう。すなわち、日本列島のなかで北海道東部は、当時から特別扱いする必要があるほど農業の後進地帯であったのである。

4 エミシ・エゾの文化

もうひとつ、重要な発見がサクシユコトニ川遺跡でなされている。それは、ここから発見された輸入品とおもわれる坏に「夷」と判読される線刻文字があったことである。⁽⁶⁷⁾この字が「夷」とよまれることは、文献のうえからいっても、ほとんど問題がないらしい。⁽⁶⁸⁾ところが、秋田市湯ノ沢F遺跡から出土したほぼ同時代とみられる土器にも、同種の文字が検出されているのである。⁽⁶⁹⁾今後の研究の進展をまたなければならぬにしろ、これらの資料、つまり北海道南部と中央部における農耕のあり方や「夷」文字土器の発見、土器や住居様式などから、考古学的にみれば、本州東北部北半と北海道南西部から中央部にかけては、文献史学から想像されていた以上に、いろいろな意味で固く結びついていたことが読みとれるのである。また、これら固く結びついていた両地域が、菊池徹夫も指摘しているように、後にいう「渡嶋の蝦夷」あるいは「エミシ・エゾの勢力圏」として推定される地域であったことも説明を要しないであろう。さらに、当時、北海道南西部から中央部にかけて居住していた人間集団が、後のアイヌ民族であることも、また確かなのである。考古学的に得られているこの仮説が、最近の形質人類学のデータと合わせてよい整合性を示すことを想いおこしていただきたい(図7)。

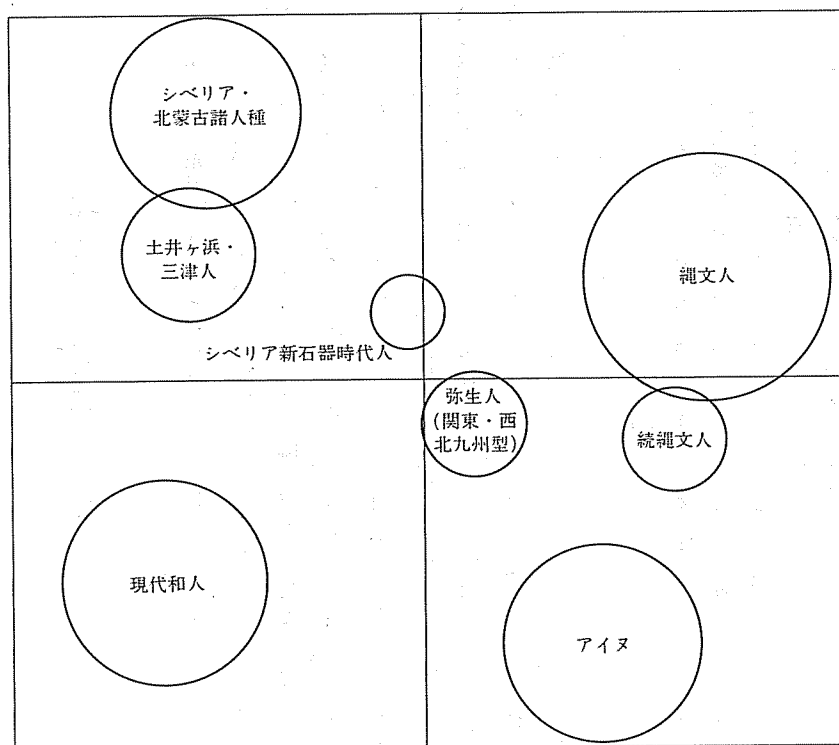


図7 形質人類学からみた日本列島内人間集団の相関関係

7種の頭骨計測値から計算したQ-相関係数行列に基づき、数量化理論第4類によって各集団の位置を2次元的に表現したもの。アイヌは縄文人から縄縄文人をへて右下の方向へ小進化し、和人は弥生人(関東・西北九州型)をへて左下の方向へ小進化したと思われるが、和人はシベリア・北蒙古諸人種に近い土井ヶ浜・三津人などの影響を受けて弥生時代以後、アイヌとは小進化の方向を異にしたと考えられる。現代のシベリア諸民族は、おそらくシベリア新石器時代人から左上方に向かって小進化したと思われる。埴原和郎『日本人頭骨形態の地域性』(日本人類学会編『人類学—その多様な発展』日経サイエンス社、1984年)、85頁、図11および同図説明を引用。

六 北海道の地域性について

北海道は、先史時代のほとんどの時期をつうじて、日本列島文化の北端に位置していた。更新世にみられた陸橋によって、北海道がアジア大陸の一部であったときはもちろんのこと、完新世の海峡出現期以降においても、程度の差こそあれこの地はいつも北方からの文化流入の窓口としての役割をもっていた。それは、約七〇〇年前の石刃鎌文化の流入、あるいは七世紀頃からみられる土着の人間集団とは異なった形質を示す人々とともに南下してきたオホーツク文化などの時期のように、はっきりと北海道内に文化の接点が見られる場合もある。しかし、それ以外の時期でも、疑いなく北海道東部地区がいろいろなレベルでの北方からの文化の流入の機能を果たしていた。同時に、北海道は日本列島文化の北端または稲作農耕を中心とする日本文化にはいりきれなかった周辺地域としての性格をもちながら、本州の文化の強い影響下にあった。その影響の強さは、北方からのものよりはるかに強大であった。北海道のもつ特殊性は、まさにこの点に集約できるとみなしてよいであろう。また、こうした特殊性が、現在にまで尾をひいていることも、また事実である。

- (1) 伊藤浩司「北海道植生概説」『北海道植生図』資料、日本造船振興財団、一九八二年一一三三頁。
- (2) 伊東信雄「樺太の土器文化」『縄文土器大成』5、講談社、一九八二年一五〇一―一五三頁。
- (3) 山口敏ほか「パネルディスカッション 海獣狩猟民・オホーツク文化の源流」『どるめん』6号、JICC出版局、一九七五年四七―九〇頁。
- (4) 札幌市教育委員会、一九八五年の資料による。

- (5) 吉崎昌一ほか『祝梅三角山地点』千歳市教育委員会、一九七四年、一一三七頁。
- (6) 興水達司「石狩低地帯に出土する黒曜石片の原産地」『地球科学』三五号、地学団体研究会、一九八一年二六七―二七三頁。

- (7) 吉崎昌一「白滝遺跡と北海道の無土器文化」『民族学研究』二六巻一号、一九六一年一三―二三頁。
- (8) 畑宏明「湯の里4遺跡の台形石器」『考古学ジャーナル』二三三三、一九八四年一五―一九頁。
- (9) 北海道埋蔵文化財センター『湯の里遺跡群』北海道埋蔵文化財センター、一九八五年、一四九頁。
- (10) 大野憲司・高橋忠彦「秋田県河辺町七曲台遺跡出土の石器について」(日本考古学協会第五一回総会研究発表要旨、一九八〇年)一二頁。

- (11) 木村英明「石器のかたちとはたらき 細石器(北海道)」『季刊考古学』四号、一九八三年七〇―七二頁。
- (12) 上野秀一・加藤稔「東北地方の細石刃技術とその北海道との関連について」『北海道考古学』九号、一九七三年二五―四九頁。

- (13) 芹沢長介「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について(予報)」『第四紀研究』一卷五号、一九五九年一七四―一八一頁。

- (14) 大嶋和雄「北海道周辺の海峡が形成した時期」『北海道考古学』一四輯、一九七八年一一―二二頁。
- (15) 木村英明「石器のかたちとはたらき 細石器(北海道)」(前掲)七〇―七二頁。

- (16) 吉崎昌一「縄文文化の発展と地域性―北海道」『日本の考古学』II、河出書房新社、一九六五年三二―三六頁。沢四郎「北海道東北部」『縄文土器大成』1、講談社、一九八二年一二五―一二七頁。官塚義人「縄文文化黎明期の北海道」『北海道の研究 考古編』1、清文堂、一九八四年一〇九―一二四頁。

- (17) 松下亘編『西股―函館市宇紅葉山西股遺跡発掘調査報告書』北海道第四紀研究会、一九七四年、一八―三五頁。

- (18) 沢四郎「北海道東北部」(前掲)一二五―一二七頁。林謙作「北海道南部、東北地方」『縄文土器大成』1、講談社、一九八二年一二九―一三〇頁。官塚義人「縄文文化黎明期の北海道」(前掲)一〇九―一二四頁。

- (19) 函館市教育委員会編『函館空港第四地点・中野遺跡―函館空港拡張工事に伴う遺跡発掘調査報告書』函館市教育委員会、一九七七年、一一―二八七頁。

- (20) 浜田知子「函館空港第四地遺跡と¹⁴C年代測定について」(『函館空港第四地点・中野遺跡—函館空港拡張工事に伴う遺跡発掘調査報告書』函館市教育委員会、一九七七年)一二六—一二七頁。
 - (21) 横山英介ほか「函館空港・中野遺跡」みやま書房、一九七九年、一七八頁。
 - (22) 静内町教育委員会「駒場7遺跡における考古学的調査」静内町教育委員会、一九八二年、一一一—一五八頁。
 - (23) 泉靖一「シタコロベで土器を発見した話」(『釧路博物館新聞』九三号、一九五九年)。
 - (24) 大場利夫・棚瀬善一「大樹遺跡」広尾町教育委員会、一九六五年、一六—六七頁。
 - (25) 沢四郎「北海道東北部」(前掲)一二五—一二七頁。
 - (26) 同前。
 - (27) 同前。
 - (28) 同前。
 - (29) 吉崎昌一「縄文文化の発展と地域性—北海道」(前掲)三六頁。藤本強「北辺の遺跡」教育社歴史新書、一九七九年、三三—三四頁。宮塚義人「縄文文化黎明期の北海道」(前掲)一一四—一一五頁。
 - (30) 藤本強「北辺の遺跡」(前掲)三四頁。
 - (31) 明石博志「曉遺跡」(『郷土十勝』五号、帯広市教育委員会・十勝郷土研究会、一九六五年)一一—四四頁。
 - (32) 明石博志・木村方一編「八千代C遺跡発掘報告書」帯広市教育委員会・十勝郷土研究会、一九七七年、一一—四四頁。
 - (33) 斎藤米太郎「櫛目文尖底土器を随伴する細石器遺跡」(『考古学雑誌』三三巻七号、一九四三年)三九—六〇頁。
 - (34) 名取武光「北海道浦幌村吉野台遺跡」(『日本考古学年報』三、一九五五年)三〇頁。
 - (35) 吉崎昌一「日本におけるブレッド・インダストリー」(『西郊文化』一四号、一九五六年)一五—一七頁。
 - (36) 加藤晋平「隣接地における新石器時代の土器」(『縄文土器大成』1、講談社、一九八二年)一三八頁。
 - (37) P. C. Васильевский, B. A. Голубев, Древние поселения на Сахалине—Сущийская стоянка (A. C. Ушерефс Кий, B. A. Корень) Сахалина в древности—Сущийская стоянка, Академия Наук, Новосибирск, 1976, СТР. 211.
 - (38) 楊虎ほか(黒竜江省文物工作队)「密山県新開流遺址」(『考古学報』四号、一九七九年、科学出版社、北京)四九八—五一八頁。
 - (39) A. П. Дерябинко, Новоениновская культура Среднего Амура (A. П. Девьянко) 『Амур в долине』 Амурского края.
- 『ストロフスカ文化』, Издательство Наука Сибирское Отделение, Новосибирск, 1970.
- (40) 名取武光「北海道浦幌村吉野台遺跡」(前掲)三〇頁。吉崎昌一「日本におけるブレッド・インダストリー」(前掲)一五—一七頁。芹沢長介・吉崎昌一「アイヌ以前の北海道」(『科学読売』一一巻五号、一九五九年)三一—三七頁。駒井和愛編「オホーツク沿岸・知床の遺跡」上巻、東京大学文学部、一九六三年、一八三—一九四頁。
 - (41) たとえば、藤本強「北辺の遺跡」(前掲)四四頁。
 - (42) Gary W. Crawford, "Paleoethnobotany of the Kamada Peninsula Jomon", Anthropological Papers, No. 73, University of Michigan, 1983, p. 41.
 - (43) 辻誠一郎ほか「北八甲田山における更新世末期以降の火山灰層序と植生変化」(『第四紀研究』二四巻四号、一九八三年)三〇—三三頁。
 - (44) Gary W. Crawford, op. cit., pp. 31-34.
 - (45) 木村尚俊「周堤墓」(『北海道の研究1』考古編1、清文堂、一九八四年)二六六頁。
 - (46) 須藤隆「亀ヶ岡文化の終末と農耕文化の開始」(『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所、一九八四年)一〇六頁。
 - (47) 林謙作「北海道南西部、東北地方」(前掲)一三七頁。
 - (48) 野村崇「北海道の亀ヶ岡文化」(『北海道の研究1』考古編1、清文堂、一九八四年)三一—五頁。
 - (49) 山内清男「日本遠古之文化」先史考古学会、一九三九年、補注。
 - (50) 藤本強「北辺の遺跡」(前掲)七三—八二頁。沢四郎「北海道東北部」(前掲)一一六頁。
 - (51) 新潟県教育委員会「国道一一六号線埋蔵文化財発掘調査報告書—内越遺跡」(『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第三、一九八三年)一六—一七頁。
 - (52) 興野義一・遠藤智一「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」(『岩出山町史』別刷、岩出山町、一九七〇年)一一—四〇頁。
 - (53) 北海道大学教養部人類学研究室「聖山」(『北海道大学教養部人類学研究室 報告』No. 1、一九七九年)一五九頁。
 - (54) 大井晴男編「オホーツク文化の諸問題」学生社、一九八二年、一一—二六頁。
 - (55) 菊池俊彦「オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連」(『北海道の研究2』考古編2、清文堂、一九八四年)三九—五九頁。

- (20) 浜田知子「函館空港第四地遺跡と¹⁴C年代測定について」『函館空港第四地点・中野遺跡—函館空港拡張工事に伴う遺跡発掘調査報告書』函館市教育委員会、一九七七年（二六八—二七二頁）。
- (21) 横山英介ほか『函館空港・中野遺跡』みやま書房、一九七九年、一七八頁。
- (22) 静内町教育委員会『駒場7遺跡における考古学的調査』静内町教育委員会、一九八二年、一一一五八頁。
- (23) 泉靖一「シタコロベで土器を発見した話」『釧路博物館新聞』九三号、一九五九年。
- (24) 大場利夫・棚瀬善一『大樹遺跡』広尾町教育委員会、一九六五年、一六—六七頁。
- (25) 沢四郎「北海道東北部」(前掲)一二五—一二七頁。
- (26) 同前。
- (27) 同前。
- (28) 同前。
- (29) 吉崎昌一「縄文文化の発展と地域性—北海道」(前掲)三六頁。藤本強『北辺の遺跡』教育社歴史新書、一九七九年、三三—三四頁。宮塚義人「縄文文化黎明期の北海道」(前掲)一一四—一一五頁。
- (30) 藤本強『北辺の遺跡』(前掲)三四頁。
- (31) 明石博志「曉遺跡」『郷土十勝』五号、帯広市教育委員会・十勝郷土研究会、一九六五年（一一—四四頁）。
- (32) 明石博志・木村方一編『八千代C遺跡発掘報告書』帯広市教育委員会・十勝郷土研究会、一九七七年、一一四四頁。
- (33) 斎藤米太郎「櫛目文尖底土器を随伴する細石器遺跡」『考古学雑誌』三三巻七号、一九四三年（二九—六〇頁）。
- (34) 名取武光「北海道浦幌村吉野台遺跡」(『日本考古学年報』三、一九五五年)三〇頁。
- (35) 吉崎昌一「日本におけるブレイド・インダストリー」『西郊文化』一四号、一九五六年（一五—一七頁）。
- (36) 加藤晋平「隣接地における新石器時代の土器」『縄文土器大成』1、講談社、一九八二年（一三八頁）。
- (37) P. C. Васильевский, B. A. Голубев, Древние поселения на Сахалине — Сущность стоянки (Р. С. Ф. Шерешевский, B. A. Голубев) 『サハリンの古代住民—ススキス遺跡』, Академия Наук, Новосибирск, 1976, СТР. 211.
- (38) 楊虎ほか(黒竜江省文物工作隊)「密山県新開流遺址」『考古学報』四号、一九七九年、科学出版社、北京（四九八—五一八頁）。
- (39) A. П. Деревинко, Новооткрытая культура Среднего Амура (А. П. Деревинко) 『アムール河中流のノヴォ』

ペトロフスク文化』, Издательство Наука Сибирское Отделение, Новосибирск, 1970.

- (40) 名取武光「北海道浦幌村吉野台遺跡」(前掲)三〇頁。吉崎昌一「日本におけるブレイド・インダストリー」(前掲)一五—一七頁。芹沢長介・吉崎昌一「アイヌ以前の北海道」『科学読売』一一巻五号、一九五九年（三一—三七頁）。駒井和愛編『オホーツク沿岸・知床の遺跡』上巻、東京大学文学部、一九六三年、一八三—一九四頁。
- (41) たとえば、藤本強『北辺の遺跡』(前掲)四四頁。
- (42) Gary W. Crawford, "Paleoethnobotany of the Kamada Peninsula Jomon", Anthropological Papers, No. 73, University of Michigan, 1983, p. 41.
- (43) 辻誠一郎ほか「北八甲田山における更新世末期以降の火山灰層序と植生変化」『第四紀研究』二四巻四号、一九八三年（三〇—三十三頁）。
- (44) Gary W. Crawford, op. cit., pp. 31-34.
- (45) 木村尚俊「周堤墓」『北海道の研究1』考古編1、清文堂、一九八四年（二六六頁）。
- (46) 須藤隆「亀ヶ岡文化の終末と農耕文化の開始」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所、一九八四年（一〇六頁）。
- (47) 林謙作「北海道南西部、東北地方」(前掲)一三七頁。
- (48) 野村崇「北海道の亀ヶ岡文化」『北海道の研究1』考古編1、清文堂、一九八四年（三二五頁）。
- (49) 山内清男「日本遠古之文化」先史考古学会、一九三九年、補注。
- (50) 藤本強『北辺の遺跡』(前掲)七三—八二頁。沢四郎「北海道東北部」(前掲)一一六頁。
- (51) 新潟県教育委員会『国道一一六号線埋蔵文化財発掘調査報告書—内越遺跡』(『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第三三、一九八三年)一六—一七頁。
- (52) 興野義一・遠藤智一「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』別刷、岩出山町、一九七〇年（一一四〇頁）。
- (53) 北海道大学教養部人類学研究室「聖山」(『北海道大学教養部人類学研究室 報告』No. 1、一九七九年)一五九頁。
- (54) 大井晴男編『オホーツク文化の諸問題』学生社、一九八二年、一一二—二六頁。
- (55) 菊池俊彦「オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連」『北海道の研究2』考古編2、清文堂、一九八四年（三九—五九頁）。

- (56) 山口敏ほか「パネルディスカッション 海獣狩猟民・オホーツク文化の源流」(前掲)六一―六八頁。
- (57) 利尻町教育委員会編『亦稚貝塚』一九七八年、一〇〇―一〇一頁、一九図の八。
- (58) 吉崎昌一・岡田淳子編『北大構内の遺跡Ⅰ』北海道大学、一九八一年、一二―七九頁。
- (59) 北海道開拓記念館『ニツ岩』(北海道開拓記念館研究報告)七号、一九八二年一九頁。
- (60) 大井晴男編『オホーツク文化の諸問題』(前掲)一八三―一八四頁。
- (61) 山浦清「オホーツク文化の終えんと捺文文化」『東京大学文学部紀要』二号、一九八三年一五七―一七九頁。
- (62) 横山英介「北海道におけるロクロ以前の土師器」『考古学雑誌』七〇巻一号、一九八四年五二―七五頁。
- (63) 菊池徹夫「蝦夷の考古学」『歴史公論』一〇九号、一九八四年一〇三―一二二頁。
- (64) (A)は竺可楨「中国近五千年來氣候變遷的初步研究」『考古学報』一九七二年第一期図三を改変使用。(B)は阪口豊「日本の先史・歴史時代の氣候」『自然』一九八四年五月号二二頁の図を改変使用。
- (65) 吉崎昌一・岡田淳子編『北大構内の遺跡3』北海道大学、一九八四年、二二頁。
- (66) 佐伯有清『北大時報』三四七号、一九八三年、表紙解説。吉崎昌一・岡田淳子編『北大構内の遺跡3』(前掲)一九頁。
- (67) 上山春平ほか「シンポジウム・古代北方文化の形成」『創造の世界』四九号、一九八四年一〇六一―〇九頁。
- (68) 秋田市教育委員会『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』一九八四年、二四七頁第七図。
- (69) 菊池徹夫『北方考古学の研究』六興出版、一九八四年、三九九―四一六頁。
- (70) 埴原和郎「日本人頭骨形態の地域性」『人類学―その多様な発展』日本人類学会編、日経サイエンス社、一九八四年七八―八七頁。山口敏「日本人の生成と時代的な推移」(同前『人類学―その多様な発展』六〇―七一頁)。